

### 東京海洋大学

東京海洋大学の海洋工学部流通情報工学科は、①工学系の情報系②社会科学系③のカリキュラムを軸に座学、実験を交えて講義している。中でも工学系の講義は、学生が経営、財務、経済などを理解できるように設けており、データ分析などを実施。これが将来の立案能力の醸成につながる

として、物流企業からの評価は高いという。同学科の黒川久幸教授は、在庫マネジメントなどが専門。データを活用して発注量の最適化や需要予測などを行う「物流管理工学」などの専門講義を担当しているほか、1年時に行う「ロジスティクス概論」では、身近な例を用いて流通加工による付加価値の向上などについて講義。また、実験では倉庫での棚の高さや通路の幅の分析などを通じ、最適な物流施設の設計方法を教える。

黒川氏は「物流関連の職に就くには、全体最適を見

## 最適な物流、立案能力を醸成



渡す能力が必要。そのためには、データの分析ができないければならない。科学的な検証に基づかないと、意志決定があいまいになり、現場の改善はできない。採用する側の物流企業からも、こうした能力の向上を促されている」と話す。

また、最近の学生の傾向について「素直で真面目。主張が少ない」と語る。半面、深く考えることにはたけており、物流に必要なとき

れるベースは持ち合わせているという。一方、学生に物流関連職の志望動機を聞いてみると、「国際物流を手掛けたい」「事業内容が幅広い」「社会への貢献」などを挙げており、仕事へのやりがいを求める声が多い。

黒川ゼミの松本雅代さんは「モノの流れに興味があった。物流は、社会になくてはならないもの。就職し、顧客に合った効率的なサービスシステムの構築を手掛けたい」と語る。ほかの学生も、講義の内容を復習したり、新聞などで最新の社会情勢を学んだり、物流に必要な勉強に取り組んでいる。

学生にとっては「追い風」が吹いている。東日本大震災の影響で、昨年は企業の採用人数が減少した。しかし、今後はその分を上乗せして採用することが予想されており、同大の企業説明会には40数社が訪れた。「物流企業だけでなく、メーカーの物流部門なども優秀な人材が求められており、学生が活躍できるフィールドも拡大していきそうだ。

今後の教育方針について、黒川氏は「当学の特長である工学系の教育に注力していく。学生の分析能力を高め、実際の現場で役立つよう在庫回転率の計算やコスト管理などができる人材を育成したい。さらに知識の幅を広げるため、商流についての講義も設けていきたい」と話している。

物流施設の見学会に参加する学生も多い。大学院修士1年の竹内玲さんは「見学会では、配送センターのピッキング作業などを実際に見ることができ、大変勉強になる。物流関連団体が主催する現場見学の機会を

将来の夢を語る学生たちと談笑する黒川教授（右から2人目）

(山上 隼人)